

「沢登りの地平線」が見えた ネパールの沢旅

小林敏之（静岡勤労者山岳会／静岡）



氷河湖に到着したメンバー（左から、筆者、成瀬氏、田中氏、佐藤氏）

沢登りとは登山形態の一つであることから、沢から山頂を目指すのが一般的だ。

世界の屋台骨と言われるヒマラヤ山脈は、8,000m峰を14座従え、5,000～7,000m峰が並ぶ高峰ばかり。標高が高くなれば酸素は薄くなり積雪がある。そんな高峰を目指す沢登りは難しいとされてきた。

勿論私達もそんな高峰を目指すことは難しいため、今までネパールヒマラヤでの沢登りは論外と考えていた。

2020年、ひょんな事から日本ヒマラヤ協会の岩崎洋氏と出会う。岩崎氏からネパールにも沢登りをしたら面白そうな沢があることを聞き、行ってみようという話で盛り上がる。折しもコロナ禍で何処へも行けずウズウズしていたのでこの話に飛

びついた。

しかし奇しくも新型コロナ「オミクロン株」が流行し始め、自粛ムードが高まり渡航を断念。

2023年、コロナも4年目を迎え落ち着きを取り戻した。これを機に再度ネパール沢登り隊が集まる。ガンジス川の支流の一つ「カルナリ川」支流西ネパール・フムラ地方にある「Rauli Khola」へ行くことを決める。最終到達地は4,230mの氷河湖「Dudh Daha」源流部とした。

行き先、日程が決まるもサラリーマンの私は3週間の休みを取得することに苦慮。

「行く」よりも「行けない」理由を探す方が気が楽だ。行かない選択をすれば日々の日常通りの時間が過ぎる。弱気な自分に嫌気がさすも、結局行きたいという想いが勝ち、なんとか休みを取得。

Nepal Airlinesのチケットを予約すると気持ちの踏ん切りも付いた。準備を重ね出発日がアツと言う間に近づく。

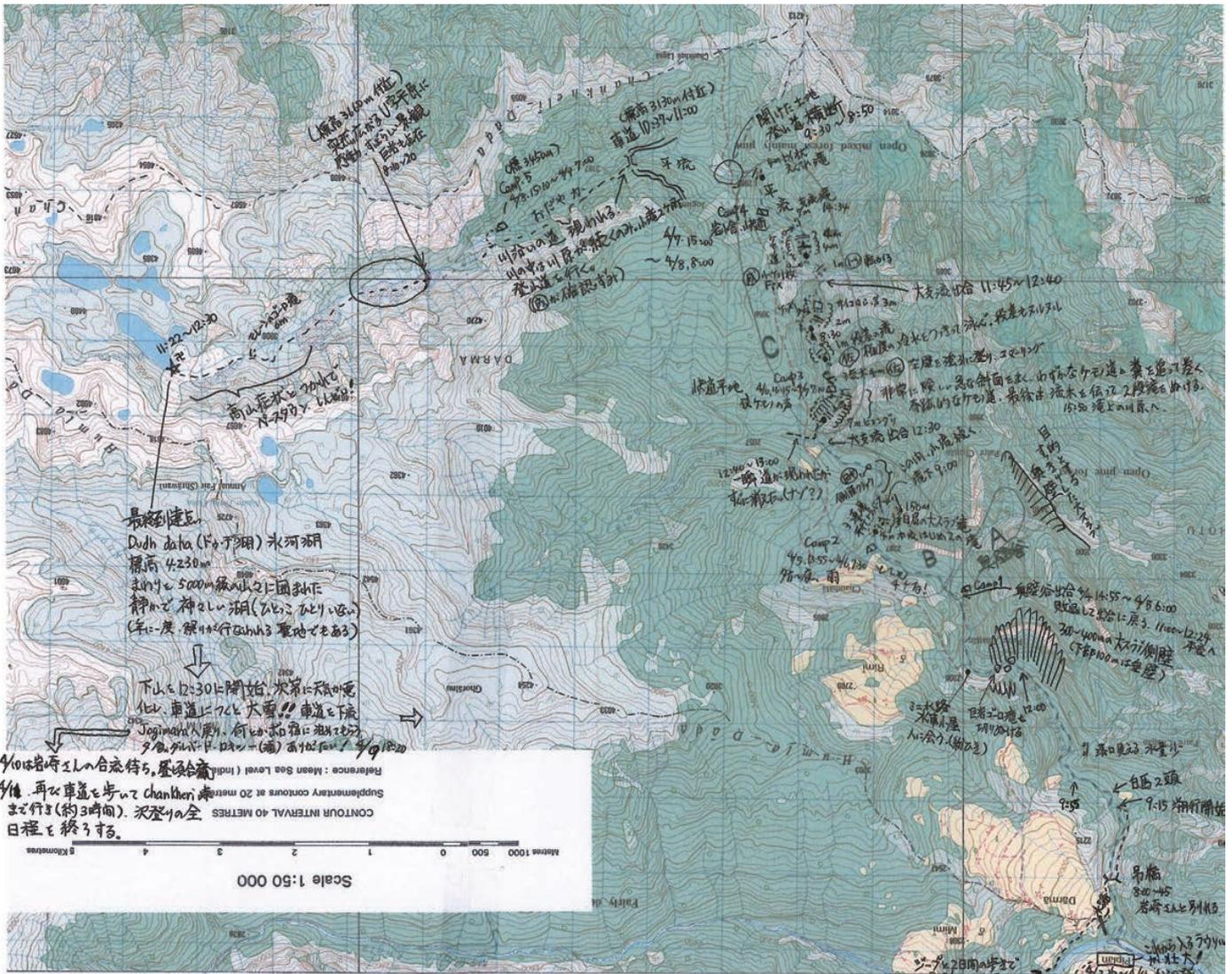
海外遠征の場合「飛行機に乗って日本を出発すれば半分成功」という言葉通り、定刻に成田空港を出発。いよいよネパールの沢旅が始まる。

カトマンズ空港に到着し、今回お世話になるエー

期 間：2024年3月30～4月20日

メンバー：成瀬陽一（充血海綿隊）、佐藤裕介（鶴城山岳会、ROUSANパートナーズ）、田中暁（充血海綿隊、ROUSANパートナーズ）、小林敏之（充血海綿隊、静岡勤労者山岳会）

費 用：航空券@約12万円＋宿泊費、食費等、一人当たり合計35万円ほど



ラウリ川の地形図に成瀬氏が遊行を記録した（南が上）

ジェント会社「コスモアドベンチャー」のシャルマさんに挨拶をしてパーミットの許可等を得る。翌日ネパールガンジ空港に飛ぶ。

翌朝西ネパールの玄関口「シミコット」へ移動する予定だったが、シミコット周辺の天候が悪く、5日間飛行機が飛んでいないとこの時に知る。明日飛ぶのか分からないままホテルで1日を潰すが、幸いにも翌日には飛行機が飛んでくれた。

標高 2,980m に位置するシミコットから見える山々には雪がベッタリと付き、空気は冷たく肌寒い。

気温が低く雪を纏った山々を見ると、この先の沢登りが不安になる。シミコット空港からジープにて標高を落とし南下するのだが、舗装されていないガタガタな道、粉塵巻き込む車内には閉口してしまっ

た。ジープを下りて次なるジープの乗り継ぎ場所を

目指す。当初の計画では1時間ほど歩けば乗り継ぎ場所に行けるということだったが、現地の人曰わく「7時間は掛かる」らしい。いきなりフル装備の重荷を背負って炎天下を歩き、私は両足小指にマメができてしまい、佐藤氏に至っては膝痛を発症。

キッチリ7時間歩いてジープを発見。再びガタガタ道&粉塵を浴びながら、先にネパール入りしている岩崎氏との合流地点を目指す。今回の旅で岩崎氏の存在はかなり大切だったため、合流予定の宿場で顔が見られた時は感無量であった。

酒好きとして有名な岩崎氏を囲み、現地の蒸留酒「ロキシ」を啣る。焼酎よりも呑みやすく美味。

翌日（4月4日）、沢の出合を確認し、いよいよ入渓だ。佐藤氏の膝痛は若干回復したようだがイマイチらしい。いつも強気な姿ばかりを見ていたので、こんな弱気な佐藤氏を見るのは初めてで心

配になる。一時は離脱しようかと考えていたらしいが、やっぱり4人で沢に入らなければ意味が無い。成瀬氏を始め私達3人も同じ気持ちであったと思う。

岩崎氏、ガイドのハスタさんに見送られいよいよ入溪。水温は低いのに沢床の岩は茶褐色で減法滑る。ゴム底の溪流シューズを選んだ私のみ四苦八苦。

入溪してから暫くは踏み跡もあり人臭い。2日掛かると思っていた奥壁沢出合に1日で着くことができた。

海外の沢といえどもやることは日本の沢登りと同じ。テン場の整地に焚き火の薪集め。勿論景気付けの一口のお酒を分け合う儀式も欠かさない。焚き火が付けば心地だ。

入溪2日目、この日は岩崎氏が以前見つけた壁、



岩崎洋氏（右から2人目）を囲んで



奥壁
ゴルジュ
内

佐藤氏が下見で確認した支流の奥壁を目指す。まずは奥壁ゴルジュを突破しなければならない。

この登攀に3日間を予定。支流の沢なのに切れ込みが凄まじく、兩岸の壁がぶっ立ってきて見事なゴルジュ地形に。「こりゃ～滝の一つでも出てきたら逃げ場が無いな～」と成瀬氏。私も同感だ。このまま奥壁基部まで行きたいと願うも目の前には立ちはだかるCS滝（チョックストーン滝）が。落差20m程であるが弱点はどこか。

CS横のクラックを登攀ラインと見定め、佐藤氏によるクライミング。膝の痛みもあるだろうにさすがの登りであつと言う間に中間部まで登るが、そこからが問題であった。クラック内にカムをセットするも板状の岩はボロボロと層状に崩れる。ガバに見えた岩も頭大の大きさに崩れた。エイドで登ろうとハーケンを打ち込むも僅かしか入らず断念。このまま突っ込むのは危険と判断しクライムダウン。

もし私達の欲求を果たすためにボルトを連打しエイドで登れば突破はできたであろう。しかし、人間の我が儘だけでそこまでしても良いのだろうか？自然のままを受け入れ、人間の限界を越えることができないのであれば、そのままを受け入れることも大切なのではないかと思う。ゴルジュ内は薄暗いが、私達の心はどこか晴れやかであった。

奥壁の登攀は残念であったが、もう一つの目的「本流遡行」がある。

気を入れ直し、遡行を開始する。

暫くは河原であったが腰まで浸かる瀧も出てきて沢登りっぽくなってきた。

2日目の夜も良いテン場にありつけた。

3日目、いよいよ連瀑帯となる。深く切れ込んだおどろおどろしいゴルジュは畏怖を感じさせる。いよいよ高巻きのお出ました。急斜面を登り、300m程高巻いたであろうか？動物の獣道を拾い最後は懸垂下降で沢に戻ることができた。進んだ距離は僅か数100m。今宵も良いテン場を見つけ焚き火を眺めながら酒を呷る。

4日目、ゴルジュの連瀑帯を抜けることができホッと一安心。楽々だなあん～って思っていたら徐々にゴルジュ地形に。高巻くことができないので今回初めての泳ぎとなる。朝一から水に入るなど躊躇してしまうほど冷たい。

続く滞も泳いで突破するも寒くて寒くて仕方がない。奥歯を噛みしめるため歯痛を発症してしまうほどだ。空から沢に日が差し込み僅か1m四方の日向に4人集まり暖を取る。あまりの寒さにここで1時間ほど休憩。

この先泳ぐ区間が無いことを願いつつ先へ進むと沢は開け、ゴルジュを突破したようであった。ここから沢は左へ90°折れ曲がり氷河湖へ一直線だ。

標高3,450m付近を今宵のテン場にするも、吹き下ろす風が冷たく寒くて仕方がない。私は何とかタープの下で我慢できたが、他の3人は焚き火の前でなければ寝られないほどであった。

6日目、朝を迎えるとコップの中の水が凍り付いていた。通りで寒いわけだ。

焚き火で暖を取り朝飯を食べ出発。急登を登り切れば目の前が一気に広がり、氷河で削られたカール状の景色が広がる。何という景色だ。カール状の真ん中にはサラサラと小川が流れ兩岸の岩壁がそそり立つ。右岸は荒々しい岩壁がむき出しに、左岸は陽が当たらないため雪がベツリと付いている。沢登りを何年もやっているが、こんな景色は見たことがない。私は心の中で「沢登りの地平線」を見た気がした。

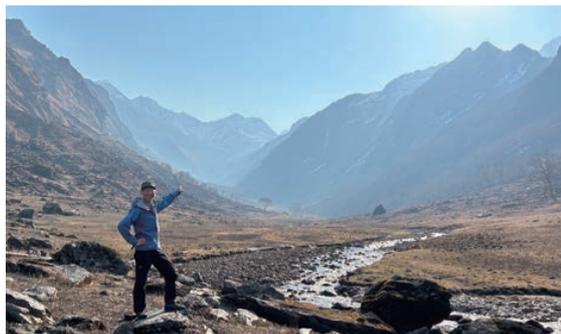
ゆっくりと歩を進めるが、近くに見えるものほど実は遠い。あの急登を登れば氷河湖に辿り着くだろうと分かっているながらもなかなか近づかない。

標高4,000mを越えたあたりから心拍数が上がり息苦しい。次第に雪が出始める。余計に歩が遅々として進まない。歩けない自分に苛つくが足を出せば何れは着くはず。巨岩帯を縫って越えるとそこには夢にまで見た氷河湖が景色一杯に広がる。先に到着していた3人とガッチリ握手をする。

成瀬氏が徐にビデオを撮り始め、一人一人に言葉を求めてくる。田中氏、佐藤氏に続いて私にカメラが向けられる。沢山言いたいことがあるのに言葉が詰まる。

ここ最近年齢と共に体力低下を感じ、モチベーションも低下。自分はこのメンバーの中に居ても良いものだろうか？いっそ足手まといになるのであれば参加しなければ良いのではないかと自問自答したこともある。

自分は泳ぎや登攀など特にこれと言った特技が



沢登りの地平線

あるわけではない。そんな私に声を掛けてくれ受け入れてくれた仲間感謝する。そう思うと涙が流れ、言いたいことも言えず言葉にならなかった。ここに来ることができて良かったと心底思う。

暫し雄大な景色を楽しみ、来た道に戻る。林道まで戻れば岩崎氏と合流できるはずだ。

「今宵はロキシーを呑みまくるぞ！」など冗談を言いながら下山すると、徐々に空が暗くなり、白いものがパラつく。なんと雪が降り始めたのだ。次第に吹雪になり、一面真っ白に。更に合流地点に到着するも岩崎氏の姿は見えない。

自分たちが計画した行程が予定よりも早く進んだため、まだ岩崎氏が追い着いてこないのだ。

一同愕然とするも仕方がなし。こんな吹雪の中、沢で泊まるのは勘弁ということで、2年前にあった道路工場の飯場を目指すことにする。但し、道路工事は終わっているため、人が住んでいる可能性は低い。

1時間ほど林道を歩くと建物が見える。中に灯りも灯り、煙突からは煙が出ている！

ネパール語は話せないのでジェスチャーで意思疎通をはかり、なんとか寝床とダルバートにありつけた。しかもロキシーまで！

7日目、岩崎氏とも合流でき、差し入れのロキシーを呑みまくる。

8日目、この沢旅の最終目的地であるチャンケリ峠までゆっくりと歩く。長いと思っていたがあっという間の八日間の沢旅を無事終えることができた。

皆さんの手助けによって今回の旅を無事終えることができた。心から感謝致します。ネパールの沢を紹介して頂いた岩崎洋氏にもこの場を借りて感謝致します。

さて、次は何処の沢で酒を酌み交わそうか？